



TITLE:

書評 Shiobhan Chapman: Paul
Grice, Philosopher and Linguist
(Palgrave Macmillan, 2005,
viii+247p.)

AUTHOR(S):

三木, 那由他

CITATION:

三木, 那由他. 書評 Shiobhan Chapman: Paul Grice, Philosopher and Linguist (Palgrave Macmillan, 2005, viii+247p.). 哲学論叢 2008, 35: 234-237

ISSUE DATE:

2008

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/96264>

RIGHT:

書評

Shiobhan Chapman: *Paul Grice, Philosopher and Linguist* (Palgrave Macmillan, 2005, viii+247p.)

三木 那由他

Paul Grice(1913-1988)といえば言語哲学、とりわけ含みの理論が有名だが、形而上学や心の哲学 (Grice の呼び方だと「哲学的心理学」) といった分野での彼の思想の内実は、ほとんど知られていない。本書で掲げられている目標は、こうした言語哲学以外の分野も含めて、Grice の思想の全体像を提示しようというものだ。そして単に彼の様々な考えを紹介するだけではなく、それらがいかなる内的な連関をもって形成されたかという点に眼目がおかれている。

序論に当たる第一章を除くと、記述は概ね時系列に沿った伝記的なものとなっている。ただし、Grice が長い期間にわたって繰り返し扱っていたテーマが取り上げられる際には、わかりやすさのために伝記的な順序を越えた言及がなされてもいる。

本書の優れた点は二つある。一つは、筆者が用いている資料が極めて豊富だということだ。本人が出版を嫌ったために、Grice には公式な論文や著作といったものがほとんど存在せず、それが研究の妨げになっているという指摘がしばしばなされる。筆者は、Grice が残した膨大な手稿やメモ、さらには彼の友人や妻へのインタビューまでも

を引用しており、資料不足が問題となっている現状に大きな貢献をしている。

もう一つの長所は、先にも挙げた Grice の形而上学などへの言及だ。しかもそうした言及においては、それが彼の言語哲学とどのように関連しているかということが繰り返し強調されており、なぜ言語哲学以外の分野における Grice の思想を重要視すべきなのかが見通しやすくなっている。

具体的な内容の紹介に入ろう。本書は全九章で構成されている。第一章では、Grice 哲学の全体像の提示という本書の目的が語られ、序論をなしている。第二章と第三章は伝記的な事柄が主となっており、Grice の哲学そのものが大きく取り上げられるのは第四章から第八章にかけてだ。そのうち、言語哲学が第四章から第六章で扱われ、心の哲学が第七章、形而上学が第八章というように割り振られている。第九章では Grice 本人の思想を離れ、いわゆる Grice 派語用論の展開が論じられている。

本書評では、とりわけ興味深い第七章、第八章を主に紹介していくが、その前にその他の章についても軽く触れておく。

第二章は、1913 年の生誕から第二次世界大戦に至るまでの Grice の歩みが語られている。とりわけ焦点となるのは処女論文「人格の同一性」(‘Personal Identity’) だ。筆者はその内容をかいつまんで解説しつつ、この時期の Grice がすでに日常言語学的方法論を取り入れていると指摘する。

続く第三章では Strawson との共同研究の

内容が主に取り上げられ、Grice が次第に Austin の理想から離れ、言語現象の一般理論という野望を抱くようになる様が語られている。

Grice の功績としてもっともよく知られる話者の意図による意味の分析、そして含み implicature の理論は、それぞれ第四章、第五章で扱われている。筆者はどちらの章でも、一般的な解説のみならず、当時のオクスフォード哲学者から Grice が受けた影響、および Grice が彼らに与えた影響を、具体的に資料を挙げつつ丁寧に論じている。

1967 年のアメリカ移住以後の Grice 哲学の展開が、第六章の内容だ。Chomsky や Davidson にみられる自然言語への形式的アプローチが、Grice にいかなるインパクトを与えたのか、これがこの章のテーマだ。

後述する第七、八章に続く第九章では、いわゆる Grice 派語用論の成立から、関連性理論、ポライトネス理論の発展、新 Grice 派語用論の出現といった、Grice 以後の言語学上の動向が整理されている。

さて、Grice の哲学的心理学と形而上学を扱った第七章、第八章の紹介に入ろう。

第七章で Grice の哲学的心理学を論じるに当たって、筆者は二つのことを協調する。第一に、哲学的心理学は人間の心理的特性としての合理性の位置付けを探究する試みであるということ、第二に、そのために Grice は、「構成主義 constructivist」のプログラムに基づいた心理の機能的説明を用いているということだ。以下、筆者による Grice

の議論の再構成を追ってみる。

Grice はまず、そもそも合理性とは何かということを明らかにしようとする。そのために彼は、「理由 reason」という語を用いた文の発話の事例を観察するという日常言語学派的な方法を取る。Grice によれば、様々な「理由付け言明 reasoning statement」は大きく二つに分けられる。信念や判断を正当化するタイプの言明と、行為や意思を正当化するタイプの言明だ。前者は「橋が壊れていたと考えるのは理に適っている」に代表されるような事例だ。それに対して後者の代表的な例は、「会議を遅らせるのは理に適っている」というものだ。Grice はこうした理由付け言明の区別が、非実践的合理性和実践的合理性の区別に対応するものと考ええる。

次に Grice は、こうした二つのタイプの合理性が実は単一の合理性の二つの側面なのだと論じる。それは、これらの言明がある構造を共有すると示すことでなされる。その構造とは、「理に適っている」などで表わされる合理性演算子 (Acc)、言明に関わるのが信念 (判断) であるか行為 (意思) であるかを示す除法演算子 (前者なら「 \vdash 」、後者なら「 $!$ 」で表わされる)、それと命題 (r) の組み合わせからなる。つまり「 $\text{Acc} + (! \vee \vdash) + r$ 」が理由付け言明の共通構造なのだ (具体的には、上の二つ目の例なら「 $\text{Acc} + ! + \langle \text{あなたは会議を遅らせる} \rangle$ 」となる)。こう論じた上で、Grice は理由付け言明が一般に適切となる条件を考える。そ

して、「I」が現れる言明の適切となる条件は〈r が真であること〉であり、「I」の場合は〈r が（何らかの意味で）よいことであること〉だとし、この「真理 truth」と「よさ goodness」をまとめて、「価値 value」と呼ぶ。それにより、理由付け言明の適切となる条件は一般に〈価値が十分であること〉となり、このことから合理性とは価値を判断する能力であると結論される。

こうした合理性が人間の心理に備わっていることを示すために Grice が取るのが、構成主義のアプローチだ。この構成主義には二つの前提がある。心理状態は観察可能な行為の背後で働く機能として説明できるということと、生物界にはアリストテレス主義的な階層構造が成立しているということだ。一つ目の前提から、ある生物において特定の観察された行為を説明するのにある心理状態が必要とされるなら、それはその心理状態を指定するのに十分とされる。第二の前提によると、それぞれの段階に属す生物はそれより下位の段階に属す生物が持つ能力をすべてもち、かつ下位の生物が持たない能力を少なくとも一つ持つというヒエラルキーが、生物界には成り立っている。ただし、これらの能力は生存に役立つものでなければならないとされる。また、この見解には目的論的な側面もあり、各能力はそれぞれ固有の目的を持つ。

これらの前提から、Grice は次のようなアプローチを取ることになる。まず必要最低限の能力（欲求、信念）のみを持った生物

を想定する。この生物に、その生存に役立つ能力を順次加えていく。こうしてその生物が人間に一致する（身に付けている能力が人間の行為を説明するのに十分となる）とき、その生物が持つ能力は人間の心理の構造に含まれると考えられる。そして Grice は、合理性が生存に役立つ能力であり、これを想定された生物に加えたものが人間にほかならないと確認することで、人間の心理には価値判断能力としての合理性が備わっていると結論する。

筆者はこのように Grice の哲学的心理学をまとめ、最後に Grice が道徳や宗教をこうした合理性によって説明できるものと見ていたと指摘し、この章を終えている。

第八章で解説される Grice の形而上学における最大のトピックは、〈価値の客観性の擁護〉だ。そしてここで筆者が注目する点は、Grice がこの形而上学を前述の哲学的心理学を拡張したものと見ているということだ。哲学的心理学においては、指定された心理状態の存在論的立場などに関してはいかなるコミットもなされていなかった。Grice の形而上学は、この哲学的心理学で使われた構成主義のアプローチを存在者に関する方法論として採用するものなのだ。

筆者によると、Grice の形而上学において重要なのは、第一に構成主義アプローチの洗練であり、第二に Grice が「靴紐原理」と呼ぶものの提案だ。

まず構成主義アプローチの洗練から見ていこう。哲学的心理学において、Grice は合

理性が人間にのみ備わる能力であると論じていた。しかし Grice によれば、合理性は生物体としての人間にとって本質的な性質ではない。というのも、人間の本質は親が人間であることに存するからだ。だが Grice の考えでは、価値の客観性を擁護するには価値評価能力である合理性が何らかの意味で人々の本質に属さなければならない。

これを解決するため、Grice は「形而上学的実体変化 Metaphysical Transubstantiation」という概念を持ち出す。人間 *homo sapiens* はもともと偶有的性質として合理性を持つに過ぎない。この合理性により人間は自身の目的について考えることができるようになる。そして合理性自体を目的として捉え、自身を合理性（価値評価）を目的とするものと把握することで、人間は自らに形而上学的実体変化を施し、「ひと *person*」となる。このとき、ひとは合理性を本質とする生物として、生物界の階層構造に加えられる。

ここで靴紐原理が必要とされる。Grice によると、第一の学である形而上学は、自身の措定する基礎存在物によって説明が完結しなければならない（自分の「靴紐」で自分を持ち上げられなければならない）。それゆえ、説明において導入する必要がある概念は、そのつど基礎存在物として体系内に取り組み直さなくてはならない。ところで、前述のようにひとは合理性（価値評価）を本質としていた。そして現にひとが存在すると考えられる以上、その本質たる合理性は説明に必要とされる。だとすれば、そ

の行使たる価値評価を成立させるものとして価値の存在も必要とされ、靴紐原理により基礎存在物として捉えられなければならないということになる。これにより Grice は価値が客観的であると結論する。以上が筆者による Grice 形而上学の解説だ。

もっとも実際には、Grice は価値すべてを客観的だとしていたのではなく、目的に付与される価値を客観的、目的に対する方法に付与される価値を主観的と捉えており (Grice, 1991, pp. 85-86)、この点で筆者の読みは不十分なものだと言える。Grice は単に基礎存在物として価値が必要となるというだけでなく、目的の客観性を保障した上で、目的に関わる価値はその対象の客観性ゆえに客観的だと論じているのだ。

Grice の合理性と価値をめぐる議論は、彼の言語哲学を知る上でも意味がある。筆者によれば、彼の含みの理論は、会話はひとの合理性によって成立するものだという前提のもとで打ち立てられている。また意味の分析は、Grice 自身によって価値の概念と結びつけて論じられている。Grice の言語哲学は、これまでそれだけを切り離して見られてきた。筆者はこの捉え方の不十分さを指摘し、かつ Grice の哲学を包括的に理解する最初の一步を切り開いたと評価できよう。本書が、いまだ埋もれている Grice 哲学を発掘する出発点となることを期待する。

文献

Grice, P. (1991). *The Conception of Value*, Oxford: Clarendon Press.